

「子ども一人ひとりの世界」

事業部長 秋山 雅光

私は中学生の頃、ぼんやりと「将来は小学校の先生になろう」と考えていました。子どもが好きということもありましたが、今では小学五年の時の担任の影響が大きかったように思います。その先生は晴れた日には授業中でもよく校庭に連れ出してくれ、外で国語の本を読んだり土筆つぐしをとったりと、体を動かして自然に触れる機会をたくさん作ってくれた人でした。

大学も教育学部に進学し、教員採用試験を受験しましたが、結果はあえなく不合格。教育実習でほんの少し先生という仕事への憧れが崩れたというと言い訳じみていますが、とにかく必死さがなかったというか、漠然と試験を受けた結果でした。

卒業後のことを考えていた時、大学の学生課で育てる会の指導員実習生募集ポスターに出会い、これが私の人生の岐路となりました。

てつきり教員になるものだと思っていた両親に、育てる会に応募したとは到底言えず、試験は黙って受けました。試験会場は東京の吉祥寺駅近くの公会堂だったと思います。試験を終えて帰宅し、合格の電話をもらってから両親に打ち明けたが、不思議と反対はされませんでした。今ではいい仕事をしていると認めてくれるようです。

こうして私は育てる会の一員になりました。指導員として現場に立った六年間は本当に目まぐるしく、喜怒哀楽の混在した何でもありの日々でした。大学を卒業したばかりの若造が子どもたちを預かって生活を共にするのは、保護者の方々の寛容さ、地域のみなさんの支え、学校の先生方との交流。すべてが感謝してもしきれません。

育てる会での仕事は、私に多くの経験を積ませてくれていますが、改めてここまで共感できたのは何だろうと考えると、小学生の頃に仲良し四人組で経験した、ある出来事が真っ先に浮かんできます。

私は東京都西部の多摩川沿いで小学生時代を過ごしました。住まいは都営団地で父親は典型的なサラリーマン。昭和五十年代の団地ですから、とにかく子どもはたくさんいました。

その頃の多摩川沿いには今以上に自然が残っていて、川には自由に遊びに行くことができ、誰かに注意されたり学校で禁止されたりしているわけでもありませんでした。大雨の後には河

川敷に大きな水たまりが出現し、そこに取り残されたフナやコイを、素手で掴んで川に戻すのは本当に楽しかった思い出の一つです。

小学校五年生にもなると行動力はグンと上がり、仲良し四人組で船をつくって川を渡ろうということになりました。当時、私の小学校では「多摩川の中州に砂金がある」という噂話があり、それを確かめようとしたのです。

船作りのヒントも川で拾った発砲スチロールから得ました。お金などありませんから、近くの魚屋に行つて事情を話し、いらなくなつた発砲スチロールを少しづつ分けてもらつて材料にしました。一ヶ月ほどかけて十個ほどを集め、繋ぎ合わせてからバラバラにならないように四方を木材で囲み、なんとか四人が乗れる船を完成させることができました。

こうして船作りが順調だつた一方で、それぞれの親の了解を得ることにとはとても苦勞した記憶があります。今ほど窮屈な時代ではなかつたものの、救命胴衣もなく小学生が自作の船で川を渡ろうというのですから、今考えれば親なら心配して当然だつたと思います。

そんな時に力になってくれたのが、仲間の一人であるS君のお母さんでした。S君のお母さんは私たちの話に真摯に耳を傾け、さらには他の親たちを根気よく説得してくれたのです。

こうして迎えた決行の日。私たちは親が見守る中、釣り人に怒られたり、流れに流されたり

しながら、なんとか中州にたどり着くことができました。もちろん砂金などありませんでしたが、誰も来たことがない場所に上陸したというだけで、大きな達成感がありました。

このエピソードを思い返すと、今、子どもと接する仕事をしている私にとって、このS君のお母さんには学ぶことが多いように思えてなりません。

いつの時代にも子どもには子どもの世界があり、大人にはそれが理解できなかったり、たいして重要に思えなかったり、真実が見えなかったりすることも多いと思います。しかし、そんな世界にもしつかり目を向けていくのが育てる会の活動であり、私の共感もそこにあるのだと改めて感じています。

これからも多くの子どもたちと出会おうと思います。その一人ひとりの世界を大事にしながら活動していくことが、育てる会らしい一つの道なのではないかと考えています。

あきやま・まさみつ……………

公益財団法人育てる会 事業部長、大学卒業後育てる会に入職、北相木村で一年、旧八坂村で五年指導員として勤務し、平成十一年より本部勤務、二十年間週末活動を担当している。「酒は人生の潤滑油」がモットー。